

令和4年7月7日（木）

「生あることへの感謝を・・・」

長く教員をしていると、思いもよらない悲しい別れがあります。特に、関らせてもらった生徒との別れほど辛いものはありません。

今回は、「生あることへの感謝を・・・」という内容で私自身が経験していることをお話しします。

去る7月2日は教え子の命日でした。今から10年前に亡くなったN君は剣道部で、いつも一所懸命頑張り、文武両道、友だちも多く、笑顔が絶えない生徒でした。

彼は、中学1年生の終わり頃、頭痛に悩まされ、病院で精密検査を行いました。診断の結果は悪性の脳腫瘍でした。

1年以上の闘病生活で「行けるときは、学校に行きたい。」と話し、実際に、入院しながらも登校する姿を見てきました。そのときの彼の言動で特に、印象に残っているのが、掃除時間に、黙々と、しかし、嬉しそうに廊下の掃除に取り組んでいた姿です。思わず、「頑張っているね。」と声をかけました。それに対して彼は「いえ、当たり前のことですから・・・」と答えました。彼にとって、私たちが日頃、当たり前（掃除や、学習、友達との会話・・・）と思っていることができることの喜びから、自然と出た言葉だと感じました。

その後、体調が悪化し、入院が数ヶ月にわたり、中3になった7月2日に息を引き取りました。当時14歳、まだまだやりたいことがたくさんあったはずですが、しかし、棺の中の彼の表情は穏やかなものでした。また、お別れのあいさつをされたご両親は彼が必死に生きようとした在りし日の姿をお話しされました。

生きたくとも生き続けることができなかつたN君への思いを馳せながら、志布志中の皆さんには、「生あることへの感謝」を忘れないで一日一日を大切に生きてほしいと強く思います。